

人朝に死し、朝にありしたぐひ夕に白骨となる、悦もさむる時あり、歎もはる、末あり、無常轉變、憂喜手のうらをかへす世の中に、思をとめてをろかにも、來世の長き苦を歎かざりけん事の、はかなさよとおもひて、はや手自ら本鳥を切て、妻子にもかくともいはずして、白川の邊にて、竹など拾ひあつめて、如形庵しまはして、明暮念佛をぞ申侍りける、此身をおしむには、あらざりければ、たゞいきのかまはんを恨とすべしとおもひて、里に出て物をこふわざも侍らず、只二心なく念佛を申侍りければ、あたりちかき人々あはれみて、命をつぐたよりをぞ玄侍りける、かくて日數へにければ、妻子聞得て、彼所に來り侍りて、かくこまらへ侍けれども、あへて返事も玄給はずいよ、念佛をぞ玄給へりける、さうなり、何してか道心もさむべきなれば、こしらへかねて歸り侍りぬ、さて彼女房の沙汰にて、いほりさるべき様につくろひ、世渡べきほどの具足ととのへ送れりければ、手自らいとなみてぞ、日數送り給ける、さる程に世の中隱なきわざなれば、處分押取ける人、是を聞て、淺猿や、かく程までは思はざりき、げにも長きよの暗こそ、悲かるべきにとて、押たりける所をば、本の主の道心おこせる人の、北の方にとらせて、やがて本鳥切て、白川の庵にいたりて、玄かくと云に、本の聖もあはれに思て、よ、と鳴めり、さらばいづちへかおはずべき、是にてもろともに念佛玄給へかしといへば、さうなり、いづちへかまかるべき、一所に侍らんこそ、本意ならめといひて、内に入ぬれば、むつまじき友となり侍りて、同聲念佛し給へりければ、功積貴すみ渡て、夜を殘す老のね覺には、あはれと聞て、涙をながす人のみおほく侍りけり、かくて二とせと申ける、三月十四日の曉に、先に世を遁給し人は、西にむきて座し、後に家を出給し聖は、かの座せる上人のひざを枕にて、眠れる如くして、終をとり給へり。

〔太平記 十三〕藤房卿遁世事

藤房致仕ノ爲ニ被參内龍顔ニ近付進セン事、今ナラデハ何事ニカト被思ケレバ、其事トナク御